
1 工程@1円～知的障害者の労働現場

19： 通勤

千葉晃央

淡水と海水が混ざり合う汽水域は豊かな生態系を築く。時間や潮の満ち引きなどによって刻々と状況も変化する。淡水、海水双方の様々な要素で豊かに構成された環境といえる。自宅から施設に通う通勤途上。そこでも「公」と「私」が混ざり合う。「汽水域」のように、その日の天候、時間帯、ご本人の体調、その前後に何が起こったのか？何が予定されているのか？…それらの要素によって、その方の「通勤」もまた刻々と豊かな可能性を持って変化をする。

域住民と施設との信頼関係を損なうわけにはいかないからである。ましてや、地域住民からの施設反対運動の課題を抱えている、もしくは抱えてきた施設も存在する。このような背景を踏まえて、起こったできごとに関して様々な対応が施設には求められる。施設の普段からの地域住民との時間の共有はもちろんこの対応の基礎になる。しかし、時には地域にあるお店などの利用者、お客として、職員や施設が地域で消費活動をしていく営みも重要になることがあった。

お客として

施設にたどり着くまでは基本的にはおうちの方で…という姿勢を施設側は提示していることが多い。いつも会う学生とのトラブル（生徒が不必要に関わってくる、学生を追いかけてしまう…）、通勤途上にあるお店やおうちで…というようなエピソード。しかし、実際そう単純ではない。何より地

人に出会う刺激

通勤手段もいろいろとある。車での送り迎えや、施設に自分で公共交通機関を使って通う方、歩いて施設に通えるように自宅を施設の近くにうつされた方もいる。てんかん発作等がある方の場合、道中で「発作」が起こる可能性もある。そのようなことも踏まえて最善と思われる方法を施設に

通う方は採用している。困ったら、助けてくれる人がいる人通りの多い道を歩くことを選択されていることもある。逆にいろいろな人に会わない方が落ち着くので人通りの比較的多くないところを選択していることもある。

イケメン

「お名前は？」イケメンな青年が駅で女性に声をかける。女性も笑顔で、まんざらでもない表情を浮かべる。場合によっては名前を伝えていることもある。青年は続けて、「〇〇さん、髪の毛を結んでいるのをとってください〜い！」と女性に言う。女性は「はっ」とした表情を浮かべる。そして、そそくさとその場を離れようとし始める。青年は「待って！待って！」と後ろに続く…。

そこは知的障害者の労働現場（施設）への通勤途上の駅である。青年はその福祉施設を利用していた。このような場面が複数回あると、駅などから連絡が入る。そして、施設の職員が一定期間付き添うこともある。その後は同じ通勤経路の職員が通勤途上で気を配るという対応をすることもあった。

そして、それでも不十分な場合は、施設への通所におうちの方が付き添われることもある。忙しい日々の中である。しかし、自分の子どもという体力的に差がある中で、親世代がついていくのは並大抵のことではない。そして、何かの拍子に親から離れてしまうことがないわけではない。そして先ほどのような場面。女性の笑顔と、その次の反応、そして立ち去ろうとする様子を連日、ご家族は目の当たりにすることにもな

る。その時のご家族の表情が忘れられない。

オシャレな服

話しはそれるが通勤途上での工夫のポイントとして、ルックスに気を付けている方も多い。女性の利用者の方では異性等からの被害にあわないよう、華美でおしゃれな服装をあえて控え、自衛をしている方の話も聞く。また、逆に街を歩き、通勤するので、オシャレをしたいのどと、職員にファッションに関するアドバイスを求め、職員が着ている服の購入先を教えてほしいと言われることもあった。



バス路線廃止？

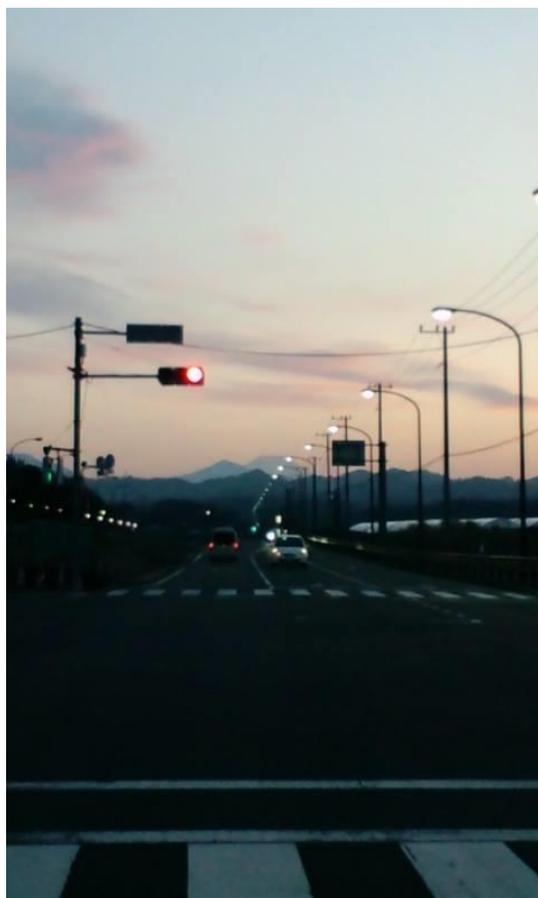
ある事業所は住宅地から離れた郊外にあった。それでも、市街地の中心部から何時間もかけて公共機関を乗り継いで多くの利用者さんが通っていた。そこで、利用者の負担を軽減しようと施設がバスを購入し、施設独自のバスによる送迎を導入した。幸いなことに利用者の体力的負担は軽減した。しかし、公共交通機関の利用者は減ったためバスの便数は激減。送迎バスの運行時間以外の遅刻早退時や、家族の方等が足を運ぶ時のアクセスが相当に不便になった。今ではすっかり乗降客が少ない赤字路線になり、廃線すら噂されるようになってしまった。結果として地域の公共交通という資源すらも「軽減」する結果となってしまった。そして、利用者の方は今度は運動不足による肥満傾向の「増加」が顕著になった。

可能性が過剰？な自転車

自転車で通われる方もいる。交通ルールは結構複雑で難しい。通勤時の交通事故もどうしてもゼロにはならない。また、危険な運転によるトラブル、高速道路を自転車で走ってしまった、自転車で遠方まで行ってしまったなどエピソードは多い。そのため、自転車は乗れるけれども、自転車は何かあるかわからないので自転車という交通手段自体をやめる方も複数きく。実際、行方不明等の状況が起こっても、公共の交通機関なら、探す場所も見当がつくし、地域等の方々も様子を目撃していることが多い。

時には手助けも得やすい。しかし、自転車では決まった路線があるわけでも、同じ方向に同乗する人がいるわけでもないのので何かあった時には見当がつきにくい。

普段の通園時の持ち物が多いという方もいる。カバンを複数持つ方もいる。そのような傾向がある方は、自転車のかごや荷台にも、たくさんの所有物が乗っていることがある。自転車は行き先も多様にするし、その荷台やかごというスペースも多様なできごとことをもたらすことも多い。





歩いてるから大丈夫？

徒歩で30分以上かけて歩いて通っている方もいる。歩きだと、何時の便に乗らなければならないというようなこともなく、渋滞もないので自由でよいという側面もある。同じバスの席に座らないといけないうようなコダワリによる同乗した方とのやりとり、車内で大きな声を出してしまうなど、乗り物利用時によくあるトラブルは起こらない。

一方で「運動をした！」「歩くから、おなかがすく、のどが渴いた！」「ダイエットができています！」という自負を生む。その実感から飲食物の買い物への誘惑が生まれることがある。歩いてダイエットをしているから大丈夫、私は頑張っている、だか

ら…という気持ち。それでも肥満の防止、エネルギーの発露として歩くことが機能している側面も非常に多い。そして、「よく歩いてきているね！」と褒められることの効果もあるように思う。実際、暑い中、寒い中、通勤に1日1時間以上も歩いて仕事に来る姿は尊敬である。私にはできない。

親と一緒に歩いている方もいる。はじめは親も運動とっておられた。しかし、年々親の加齢とともに体力がついて行かなくなる。その時期までに、ご本人一人で通うことができる力を積み上げること、それができているかどうかによって、その後の同じ施設への継続的通勤（継続的利用）ができるかにかかわる時もある。

問題をどう扱ったのか？

はじめに触れたように、通勤という場面は公私が混ざり合うところであるため、なかなか難しい側面が伴う。責任問題にまつわるところも、とてもデリケートなテーマである。ただ単純に線引きをするのではなく、その課題をどう扱ったのかというところが大きい。われわれ援助職がどう扱ったのかをご本人もご家族も地域住民も、そして社会もみているのである。それが今の障害者問題を象徴するエピソードとして積み重ねられていくのである。

(写真：橋本総子)

BACK ISSUES

クスリの作用、人の作用 18 2014年9月

倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月

触れる 16 2014年3月

対談企画「教育と福祉の連携を模索する」2014年3月

情報の格差 15 2013年12月

20年前のノートから 14 2013年9月

そうじのねらい 13 2013年6月

個別化の暗部 12 2013年3月

グループワークの視点 11 2012年12月

実習生がやってきた！ 10 2012年9月

月曜日のせいやな 9 2012年6月

所得を決める福祉職？ 8 2012年3月

世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月

この現場へのたどり着き方 6 2011年9月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011年9月

旅行がない！ 5 2011年6月

職員の脳内回路 4 2011年3月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010年12月

利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月

障害者自立支援法で不景気に！？ 1 2010年6月